

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2021 年 5 月

「天国で」「霊的な賜物（Ⅱ）」「なまぬるい人への治療法」「長いものから揚げ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「霊的な賜物(Ⅱ)」

4

聖書の教え

朝のマナ

天国で

8

In Heavenly Places

現代の真理

「なまぬるい人への治療法」

40

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「長いものから揚げ」

46

レシピ

お話コーナー

「再び来られる(Ⅱ)」

48

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

発行日 2021年4月4日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: iStock on Front page; Sermon View on page 48

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

Printed in Japan

キリストが休まれた安息日

創造の偉大なみわざは、六日で完成した。神は「そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日にそのすべての創造のわざを終って休まれたからである」(創世記 2:2,3)。神は、そのみ手のわざを見て満足された。あらゆるものは、完全で、創造主である神にふさわしかった。神は、疲労のためではなく、その知恵と恵みのわざとその栄光のあらわれを心から喜んで休まれたのである。(人類のあけぼの上巻 22)

キリストは万物をお造りになったのだから、キリストが安息日を造られた。(各時代の希望上巻 372)

イエスは、ご自分がするためにおいでになった働きをなしとげ、臨終の息の下から「すべてが終った」と叫ばれたときにはじめて息を引きとられた(ヨハネ 19:30)。(各時代の希望下巻 282)

世の始めに、天父とみ子は、創造の働きののちに安息日を休まれた。「天と地と、その万象とが完成した」とき、創造主は天のすべての住民とその輝かしい光景をながめてよろこばれた(創世記 2:1)。…いまイエスは、あがないの働きを休まれた。…神と天使たちは、キリストの完成された働きから生じるこの結果をごらんになった。キリストが休まれた日は永遠にこの光景に結ばれている。…「神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時」になっても、創造の安息日、すなわちイエスがヨセフの墓で休まれたこの日は、やはり休息とよろこびの日となるのである(使徒行伝 3:21)。(同上 293, 294)

ていねいに、うやうやしく彼らは、自分たちの手でイエスのおからだを十字架からおろした。傷つき破れた主のおからだを見たとき、同情の涙が走り落ちた。…それから彼らは、重い石が墓の入口にころがされて、救い主が休まれたままにしておかれるのを見た。…「そして帰って、…それからおきてに従って安息日を休んだ」(ルカ 23:56)。

それは、悲しみの弟子たちにとって、また祭司たち、役人たち、律法学者たち、民にとって、忘れることのできない安息日であった。備え日の夕暮れの太陽が沈むと、ラッパが吹き鳴らされて安息日が始まったことを告げた。(同上 300, 302)

ついに、イエスは休まれた。屈辱と拷問の長い日が終わった。夕日の最後の光線が安息日の到来を告げたとき、神のみ子は、ヨセフの墓の静けさの中に横たわっておられた。ご自分の働きを完成し、沈黙のうちに手を組んで、イエスは、安息日の聖なる時間を休まれた。(同上 282)

週の初めの日の夜がゆっくりと過ぎて行った。夜明け前の一番暗い時間がきいていた。キリストはまだ囚人としてそのせまい墓の中におられた。(同上 309)

キリストがとき放たれる時が迫っていた。(同上 308)

第22課 霊的な賜物(Ⅱ)

奇跡をおこなうこと

イエスは弟子たちが満ちみちた聖霊を受けるとき、奇跡を行うようになると約束されました。「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」(マルコ 16:17,18)。

これらの奇跡は、ペンテコステの日の聖霊降下の後に弟子たちに起こりました。「彼らはわたしの名で悪霊を追い出す。これが使徒行伝 16:16-18 で述べられているように成就しました。

「新しい言葉を語り」。

このことは、ペンテコステの日に使徒行伝 2:4-11 に述べられているように、成就しました。

「彼らはへびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。」これもまた、使徒行伝 28:3-5 に書かれているように、パウロによって成就しました。

「病人に手をおけば、いやされる」。他のどんな奇跡よりも、この奇跡は多数の使徒たちによって現されました。使徒行伝 3:2-7; 5:15, 16 をご参照下さい。病人を癒すだけでなく、死人さえ生き返らせられました。使徒行伝 9:37, 40; 20:9-12 をご参照下さい。

使徒たちは、聖霊で満たされていたため、奇跡を行いました。わたしたちの時代、数多く奇跡を行う人がいますが、彼らは使徒たちのように癒すことはできません。あらゆる人をその病気から癒し、死人をよみがえらせること、あるいはただ、だれかの影の下を通るだけで人を癒しさえするのは「聖なる癒し」です。ペテロは集会を催し、ある日一回の説教をただで 3,000 人もの人々が改心しました。なぜ、現代においては、そのような範囲で奇跡が行われないのでしょうか。聖霊の賜物は、決して地上から引き上げられたわけではありません。しかし、人々

は背教によって自ら、神から身を引いてしまいました。終わりの時代に神の教会が聖霊の賜物によって準備ができれば、再び使徒たちの時代のように満ちみちた聖霊が注がれると約束されています。

古代より、奇跡のわざは神の力によるものばかりではなく、サタンの力による偽ものの現われもありました。このことはモーセの体験において、またエジプトの魔術師でもはっきり説明されています。今日も様々な宗教、無神論者、異教徒たちが奇跡を行います。そのため、わたしたちは、どの奇跡が神によるものであるかを見極めなくてはなりません。奇跡や奇跡を行う人を試すための基準があります。すなわち、「ただ教とあかしに求めよ。もし彼らがこの言葉によって語らないならば、それは彼らのうちに光がないためである」(イザヤ 8:20 欽定訳)。

異言(言語)の賜物

多くの人々は、異言(言語)の賜物が最も重要であると理解しています。その賜物は、リストの中で、1 番目ではなく、7 番目に挙げられています。異言とは、不明瞭にぶつぶつ話すことではありません。それは、人によって語られている言葉、または言語です。使徒たちがペンテコステの日に異言の賜物を授かったとき、彼らは様々な国の言語を話すことができるようになりました。その当時は、およそ 17 の国の人々が存在していました。

「そして驚き怪しんで言った、『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。わたしたちの中には、パルテヤ人、メジヤ人、エラム人もおれば、メソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジヤ、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者もいるし、またローマ人で旅にきている者、ユダヤ人と改宗者、クレテ人とアラビヤ人もいるのだが、あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとは、どうしたことか。』」(使徒行伝 2:7-11)。

パウロは、わたしたちが賜物について知らずにいてもらいたくないと述べており、異言の賜物とは、他の国の言葉、もしくは言語を話す能力であることを示しています。「それと同様に、もしあなたがたが異言ではっきりしない言葉を語れば、どうしてその語ることがわかるだろうか。それでは、空にむかって語っていることになる。世には多種多様の言葉があるだろうが、意味のないものは一つもない。

…わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する。しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、ほかの人たちをも教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい。…もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に對した神に對して語っているべきである」(コリント第一 14:9, 10, 18, 19, 27, 28)。

使徒たちの時代においては、異言の賜物が必須でした。なぜなら使徒たちの数はわずかで、また彼らのほとんどは、教育を受けていなかったからです。しかし、福音は、その当時知られていた全ての国々に伝えられなければなりませんでした。そのため、他の言語についての知識不足は、聖霊によって異言の賜物で補われ、彼らはあらゆる国民、国語、民族に對して福音を伝えることができるようになったのです。現代においては、ほとんどすべての国において、自国語で聖書を読むことができます。

全ての賜物は最後の時代に降り注がれますが、特に預言の賜物が神の民にとって必要なものとして言及されています。

「預言がなければ民はわがままにふるまう、しかし律法を守る者はさいわいである」(箴言 29:18)。

最後の教会、すなわち残りの教会においては、預言の賜物が再び確立されます。神の忠実な民については次のように述べられています。「龍は、女に對して怒りを発し、女の残りのすえの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに對して、戦いをいどむために、出て行つた。… イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」(黙示録 12:17 欽定訳; 19:10)。

最も重要な賜物

「だが、あなたがたは、更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう」(コリント第一 12:31)。

望むべき最もすぐれた賜物が、愛 (CHARITY、つまり LOVE) であることがコリント第一 13 章に完全に説明されています。そのあと要約して、パウロは次のように結論づけています。「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」(コリント

第一 13:13)。

神が人類にかつて与えてくださった最大の賜物は、ご自分のひとり子を与えた神の愛のうちに表現されました。そして、このお方は、わたしたちを愛してくださるからこそ、そうしてくださったのです。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:16)。

この神の完全な愛は、最もすぐれた賜物を真剣に求める人々を動機づける原則となります。自分の心の中に神の愛を持つ人は、神が求めておられることを行うようになります。

「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない」(ヨハネ第一 5:3)。

「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう」(コリント第一 13:4-8)。

霊の賜物は聖別し、「あらゆる真理へと導」きます。神への愛、また神のみ言葉への愛は、人の信仰を強めます。霊の諸々の賜物はその正しい場所におかれ、神のみ言葉を効果的に宣べ伝えるために用いられます。この完全な賜物は、全ての真理のうちにあって衰えることなく、衰えることはあり得ないのです。

天国で

In Heavenly Places



5月

天父のご要求

「ただ願わしいことは、彼らがつねにこのような心をもってわたしを恐れ、わたしのすべての命令を守って、彼らもその子孫も永久にさいわいを得るにいたることである。」(申命記 5:29)

神は、ご自分の民に対して、父親の関係にある。そして、このお方には、わたしたちの忠実な奉仕という父親としてのご要求がある。キリストの生涯を考えてみなさい。人類の頭として立ち、ご自分の御父に仕えられたこのお方はすべての息子がどのようになるべきか、またなれるかを表す模範であられる。キリストが捧げられた服従を、神は今日人類から求めておられる。このお方は愛のうちに、進んで自由にご自分の御父に仕えられた。このお方は、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と宣言される(詩篇 40:8)。キリストは、ご自分がなすために来られた働きをなしとげるためには、どんな犠牲も大きすぎると、またどんな苦労も大変すぎるとは思われなかった。12歳のときにこのお方は、「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と仰せになった(ルカ 2:49)。このお方はすでに召しを聞かれ、そして働きを開始されていた。「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」と仰せになる(ヨハネ 4:34)。

このようにわたしたちも神に仕えるべきである。最も高い標準の服従にしたがって行動する者だけが仕えているのである。神の息子むすめとなりたい者たちはだれでも、自分がキリストと神と天の御使たちの共労者であることを証明しなければならない。これがすべての魂にとってテストである。……

神がご自分のみ摂理を実行なさるにあたり、このお方の偉大な目的は、人々を試し、彼らに品性を発達させるための機会をお与えになることである。こうして、このお方は彼らのご自分の戒めに従順か、あるいは不従順かを試されるのである。善行によって、神の愛を買うのではない。しかし、それらはわたしたちが愛を持っていることを表すのである。もし、わたしたちが意志を神に明け渡すのであれば、神の愛を得るために働くことはしない。このお方の愛は無償の賜物として魂に受け入れられる。そして、このお方を愛する愛から、わたしたちは喜んでこのお方の戒めに従うのである。

今日、世の中にはただ二種類の人たちがいる。そして、裁きのときには、ただ二種類の人たちだけが認識されるのである。すなわち、神の律法を犯す者たちとそれに服従する者たちである。キリストはわたしたちに自分が忠実か不忠実かを示すテストをお与えになる。このお方は「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。…わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である」と仰せになる(ヨハネ 14:15 - 21)。(ビュー・アンド・ワルド 1910年6月23日)

5月2日

服従におけるわたしたちの模範

「あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。 キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった」(ペテロ第一 2:21, 22)

わたしたちの前には、キリストのようになれる、すなわち、神の律法のすべての原則に対する服従というすばらしい可能性が与えられている。しかしわたしたち自身では、この状態に達するのに、まったく無力である。人のうちにある善はすべて、キリストを通してその人にもたらされたのである。わたしたちが救われ得る前に持たなくてはならない神のみ言葉が宣言する聖潔とは、わたしたちが真理の御霊の教えと抑制する感化力に屈服してひれ伏すときに神の恵みが働く結果なのである。

人間の服従は、キリストの義の香によってのみ完全とされ得る。その香は、すべての真の服従の行動を神の香りで満たす。 クリスチャンのなすべき分は、すべての欠点を克服するのに辛抱強くあることである。彼は、絶えず自分の病んだ魂の異常を癒していただくために救い主に祈らなくてはならない。彼には、克服するためにはなくてはならない知恵と力がない。それらは主に属するものである。そして、このお方はへりくだりと悔悟のうちにご自分に助けを求める者たちにそれらを与えてくださる。

不聖潔から聖潔への変化の働きは、継続的な働きである。日毎に神は人の聖化のために労しておられる。そして、人は 正しい習慣を培うために辛抱強い努力をなすことによってこのお方に協力しなくてはならない。……

神は、ご自分に信頼をおく者たちの最高の期待以上のことを成就してくださる。このお方はわたしたちがへりくだって悔い改めているとき、ご自身をわたしたちにあらわすことができ、またそうしてくださるところに自分たちがいるのだということを感じているように望んでおられる。このお方はわたしたちが、過去のあわれみと祝福を、わたしたちにさらに高く、大きい祝福を賜るはずだという根拠として強く懇願するとき、非常に喜ばれる。このお方はわたしたちがこのお方を愛し、このお方の戒めを守ることによって自分たちの愛の真実性に対する証を担うとき、誉を受けられる。このお方は、わたしたちが第七日目を区別し、神聖で聖なる日とするとき、誉を受けられる。こうする者にとって、安息日はしるしであり、神は「主なるわたしが彼らを聖別する」と宣言なさる (エゼキエル 20:12 英語訳)。聖化とは神と習慣的に交わることを意味する。神の子らである者たちを愛する神の愛ほど、大きく、力強いものは他にない。(ビュー・アンド・ハルド 1906 年 3 月 15 日)

キリストの上に建てる

「それゆえ、主なる神はこう言われる、『見よ、わたしは シオンに一つの石をすえて基とした。これは試みを経た石、堅くすえた尊い石である。『信ずる者はあわてることはない』。』(イザヤ 28:16)

「すでにすえられている土台以外のものをすえることはだれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである」(コリント第一 3:11)。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝 4:12)。み言葉なるキリスト、神の啓示、すなわちこのお方のご品性、このお方の律法、このお方の愛、このお方の生涯の表れが、わたしたちがその上に耐えうる品性を築くことのできる唯一の基礎である。

わたしたちは、このお方のみ言葉に従うことによってキリストの上に建てる。義を単に喜ぶだけではなく、義を行う者が、義なのである。聖潔とは恍惚状態ではない。それはすべてを神に明け渡す結果である。それは、わたしたちの天父のみ旨をなすことである。

宗教はキリストのみ言葉を行うことによって成り立っている。神の恩寵を得るために行うのではなく、まったくそれに値しないわたしたちが、このお方の愛の賜物を受けたから、そうするのである。キリストは人の救いを、単なる告白だけの上におくことはなさらず、義の行いに表される信仰の上におかれる。「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である」(ローマ 8:14)。その心に聖霊が触れた者たちではなく、ときどきその力に屈服する者ではなく、御霊によって導かれている者たちが神の子なのである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1908 年 12 月 31 日)

わたしたちは、主にある聖なる宮へと成長する、神の息子むすめたちとならなければならぬ。「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。…使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である」(エペソ 2:19, 20)。これがわたしたちの特権である。……

すべての品性は聖所の秤によって測られるべきである。もし、道徳的品性と霊的進歩が機会と祝福に見合わないならば、名前の反対側に「足りない」と記録される。世の光がわたしたちの導き手であられる。そして、道はわたしたちがイエスのみ足の跡をすすむにつれて、ますます明るくなっていく。ああ、わたしたちは自分の導き手なるお方の近くにいつもいることができるように!……へりくだってイエスのご品性を研究する者たちは、ますますこのお方のみかたちを反映するようになる。(レビュー・アンド・ヘラルド 1895 年 3 月 19 日)

5月4日

真の宗教のテストである服従

「木はそれぞれその実でわかる。茨からいちじくを取ることはないし、野ばらからぶどうを摘むこともない。」(ルカ 6:44)

「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、…自分を吟味するがよい」(コリント第二 13:5)。ある良心的な魂は、これを読んで、ただちに自分たちのすべての気持ちや感情を批判し始める。しかし、これは正しい自己吟味ではない。吟味されるべきなのは、ささいな気持ちや感情などではない。生活、品性が、唯一の品性の標準である神の聖なる律法によって測られなければならない。実は木の性格を証する。わたしたちの感情ではなく、働きが、わたしたちの証を担うのである。

感情は、それが勇気づけるものであっても、落胆させるようなものであっても、霊的状态の試金石とされるべきではない。神のみ言葉によって、わたしたちは、このお方の前にある自分たちの真の状態を決定すべきである。多くの者たちは、この点において当惑している。彼らが幸せで喜んでいるときには、彼らは自分たちが神に受け入れられていると考える。変化がおとずれて、彼らが意気消沈すると、彼らは神が自分たちをお捨てになったと考えるのである。……神はわたしたちがご自分を信頼せずに人生を歩むことを望まれない。……わたしたちが罪人であったときに、神はわたしたちのために死ぬためにひとり子をお与えになったのである。わたしたちはこのお方のいつくしみ深きことを疑うことができるであろうか。……

しかし、忠実な義務の遂行は神のご品性の正しい見解と手に手を携えていく。主人のために熱心になすべき働きがある。キリストは、貧しい者に福音を宣べ伝えるために来られた。そして、このお方は、ご自分の弟子たちをご自分がなすために来られたのと同じ働きをするために送り出された。今日もまた同様に、このお方はご自分の働き人たちを送り出される。道やかきねから、このお方のために束が集められなければならない。

永遠の甚大な事柄が、わたしたちに、まるでわたしたちが美しい花をめどのようにそれをめめるために真理が外庭に放っておかれているような想像上の宗教、言葉と形式の宗教以上のものを要求している。それらは、試練や困難が来ると神を信頼しない感情の宗教以上のものを要求している。聖潔は告白によって成り立っているのではなく、十字架を掲げ、神のみ旨をなすことによって成り立っているのである。……『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」(ヨハネ第一 2:4, 5)。(ビュー・アンド・ワルト 1907年2月28日)

わたしたちの案内であり 相談者である神のみ言葉

「あなたはわたしのともしびをともし、わが神、主はわたしのやみを照されます。」
(詩篇 18:28)

神のみ言葉はわたしたちの光である。それは、キリストの血によって買われたこのお方の嗣業に対するこのお方のメッセージである。それは、わたしたちの案内のために記された。そして、もし、わたしたちがこのみ言葉を自分たちの相談相手とするならば、わたしたちは、決して知らない道に歩むことはない。わたしたちの言葉は、それが家庭であっても、あるいは家庭の外にいる人たちとの交わりであっても親切で愛情深く、純潔なものとなる。もし、わたしたちがみ言葉を研究し、それをわたしたちの生活の一部とするならば、わたしたちは、包括的で健全な経験をもつようになり、いつも真理を語るようになる。わたしたちは、間違いを犯すことがないように、自分たちの日常の言葉と生活の方向性をみ言葉と比較しつつ、自分たちの心を勤勉に探るのである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1906年3月22日)

この時代の世には、あたかも自分たちが無限のお方のみ言葉を好き勝手に疑問視したり、このお方の決定と規則を、自分の思いのままに是認したり、差し替えたり、作り変えたり、また無効にしたりしながら見直すことができるかのように振舞う者が多くいる。わたしたちは人間の意見によって導かれている間は、決して安全ではない。しかし、「主はこう言われる」によって導かれるとき、わたしたちは安全である。わたしたちは、誤ることのない裁き主の決定以下のいかなる標準にも自分たちの魂の救いを委ねることはできない。

神を自分の案内者とし、またそのみ言葉を自分たちの相談者とする者たちは、命のともしびをながめているのである。神の生けるみ言葉は彼らの足をまっすぐな道へと導く。このように導かれる者たちは、あえて神のみ言葉を判断しようとはしない。そうではなく、いつも神のみ言葉が自分たちを判断するように守るのである。彼らは自分たちの信仰と宗教を生ける神のみ言葉から得る。それは彼らの道を方向づける案内であり、相談者である。み言葉は真実、彼らの足にとって光であり、彼らの道のともしびである。彼らは変化も回転の影もない光の御父の指示の下に歩む。その優しいあわれみがご自分のすべてのわざの上にあるお方は、正しい者の道を、夜明けの光とし、いよいよ輝きを増して真昼としてくださるのである。(同上3月29日)

聖書は、神の民に対する神のみ声である。わたしたちが生きた聖書を研究するとき、わたしたちは神がご自分の民にご自分のみ言葉から語っておられるのを覚えるべきである。……もし、わたしたちが聖書を探る重要性を悟るならば、どれほどもっと勤勉にそれらを研究することであろうか！(同上3月22日)

5月6日

善悪の偉大な標準

「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にとのえられた者になるのである。」(テモテ第二 3:16, 17)

神のみ言葉には、神の人が完全になるために重要不可欠なものがすべて含まれている。それは、価値のある尊いものでいっぱいのお宝庫のようなものである。しかし、わたしたちはその富を感謝もしないし、自分の身に真理の宝を身につける必要性も悟らない。わたしたちは、自分たちで聖書を探る重大な必要性を悟らない。多くの者が、何か世間的な利益を追求するために、あるいはなにか軽薄な娯楽にふけるために、神のみ言葉の研究をなおさりにする。……ああ、わたしたちが神のみ言葉の探求を捨てるよりは、それが何であつても地上の性質を持つものを捨てるほうがはるかに良いのだが!それは自分たちを永遠の命に賢い者とすることができるのである。「神の靈感を受けて」、……書物中の書物は、わたしたちの敬神的な注目を最高に要求している。……

天の啓示する真理を探るとき、神の霊は、聖書の誠実な探求者と緊密なつながりを持つようになる。神の明らかにされたみ旨を理解することにより、思いは大きくなり、拡大し、高尚にされて、思いのすべての機能を驚くべき真理との接触によって、新しい活力が授けられる。……

理解は、それがなじんでいる事柄の水準となる。もし、すべての者が、聖書を自分の研究課題とするならば、わたしたちはより発達し、より深く考えることができ、聖書と関係なく世の科学や歴史を熱心に研究してきた者たちに比べてはるかに偉大な知性をあらわす民を見ることであろう。聖書は、真理を真に探究する者に、高度の精神的な教えを与え、彼の機能は富ませられ、それによって神の事柄を瞑想する。自己は低くされ、神とその明らかにされた真理とが高められる。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1893 年 1 月 30 日)

聖書は善悪の偉大な標準であり、はっきりと罪と聖潔を定義している。わたしたちの生活に金糸のように通っている、その生きた原則は、試練や誘惑におけるわたしたちの唯一の安全な道なのである。(ビュー・アンド・ワールド 1908 年 6 月 11 日)

いと高き者の謁見者

「これらのことを考えて、わたしたちがまた絶えず神に感謝しているのは、あなたがわたしたちの説いた神の言を聞いた時に、それを人間の言葉としてではなく、神の言として 一事実そのとおりであるが一受けいれてくれたことである。そして、この神の言は、信じるあなたがたのうちに働いているのである。」(テサロニケ第一 2:13)

聖書は、わたしたちがあたかも自分の耳でこのお方を聞くことができるかのように確かな、わたしたちに語られる神のみ声である。生ける神のみ言葉は、単に記されているだけでなく、語られている。わたしたちは、聖書を神の託宣として受け入れるだろうか。もし、わたしたちがこのみ言葉の重要性を悟るならば、わたしたちはそれを何という畏敬をもって開くことであろう。そして、何という真剣さでその教訓を探ることであろうか。聖書を読み、それを熟考することは、いと高き者の謁見とみなされるべきである。

神のみ言葉は、服従するためにわたしたちに語られたメッセージである。世の終わりが臨もうとしている者たちへの訓戒のために記された真理を心から理解したいという精神をもって、勤勉に熟読されるべき書巻である。それは他の書物のためになおざりにされてはならない。……わたしたちが聖書を開くとき、自分の生活をその要求と比較し、自分の品性を義の偉大な道德的標準によって測ろう。(原稿30a, 1896年)

キリストの命は、世に命を与えるものであり、このお方のみ言葉の中にある。イエスが病を癒し、悪鬼を追い出したのはこのお方のみ言葉によってであった。ご自分のみ言葉によって、このお方は海を鎮め、死人を生かされた。そして、人々はこのお方のみ言葉には力があるということを証言した。このお方は、旧約時代のすべての預言者や教師たちに語られてきたように、神のみ言葉を語られた。聖書全体は、キリストの啓示である。それは、わたしたちの力の源である。

わたしたちの肉体的な命は、食物によって支えられる。同様に、わたしたちの霊的な命は、神のみ言葉によって支えられる。……わたしたちが栄養を受けるためには自分で食べなければならないように、わたしたちは神のみ言葉を自分で受けなければならない。わたしたちは、単に他人の思いを介してそれを得るだけであってはならない。

しかり、神のみ言葉は命のパンである。…それは魂に不死の活力を与え、経験を完全にし、そして永遠に続く喜びをもたらす。(レ'ュー・アンド・ハルト' 1908年6月11日)

5月8日

喜びと慰め

「あなたのみ言葉はいかにわがあごに甘いことでしょう。蜜にまさってわが口に甘いのです。」(詩篇 119:103)

神はわたしたちにわたしたちの足のともしび、またわたしたちの道の光として、ご自分のみ言葉を与えてくださった。その教えには、わたしたちの生活上におけるあらゆることにおいてわたしたちの繁栄に関係している。わたしたちの地上の事柄においてさえ、それは、他のどんな相談者より賢い案内である。……

聖書を研究するに伴って、それを正しく理解するようになる。生徒がどの方向を向いても、彼は神の無限の知恵と愛が表示されているのを発見する。真に改心した者にとって、神のみ言葉は生活の喜びであり慰めである。神の霊が彼に語りかけ、彼の心は潤された園ようになる。

聖書研究より知性を強めるために適しているものはない。他のどんな本も、聖書の広くて高尚にする真理ほど、思想を高めて機能に活力を与えるのに有力なものはない。もし、神のみ言葉が、しかるべきほどに研究されるならば、人は、この時代にはめったに見られることのない思いの広さと品性の高尚さを持つようになる。

神のみ言葉の研究から得られるほど、堅固で、一貫しており、遠大な知識はない。もし、この広大な世界に他の書物がなかったなら、キリストの恵みによって実行される神のみ言葉は、この世において人間を将来の不死の生涯にふさわしい品性をもった完全な者としたであろう。み言葉を研究し、それを信仰のうちに真理として受け入れ、それを品性に取り込む者は、すべてのすべてであられるお方のうちにあって完成された者となる。人類の前におかれた可能性のゆえに神に感謝する。

「これまでに書かれた事がらは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである」(ローマ 15:4)。「すべての事にあなたの進歩があらわれるため、これらの事を実行し、それを励みなさい」(テモテ第一 4:15)。「人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」(ペテロ第一 1:24, 25)。

神のみ言葉の研究と祈りに捧げられた時間は、百倍にも報いられる。(ビュー・アンド・ヘラルド 1906 年 6 月 11 日)

敵に対する防御

「その心には神のおきてがあり、その歩みはすべることがない。」(詩篇 37:31)

多くの者が聖書研究を怠るために思いがけずに罪を犯す。彼らは見張っていなかった。そして、サタンが彼らをまんまと餌食としたのである。(手紙 1, 1904 年)

神のみ言葉の神による確かな保証をしっかりとつかむ者たちには、すばらしい可能性が開かれている。神の民の前にはまだこれからもたらされる栄光に満ちた真理がある。彼らが聖書の中にあると思ってみなかったような特権と義務が彼らの前に明らかにされる。彼らが、み旨を行いつつ謙遜な服従の道に従っていくにつれ、いよいよ神の言葉をますます知るようになる。……

神の靈感を受けた尊い信仰は、品性に強さと高尚さとを与える。このお方のいつくしみ深さ、このお方のあわれみそしてこのお方の愛を熟考するとき、より明確に、さらにはつきりと真理を掌握するようになる。より高く、より聖なる、心の純潔と思想の明晰さとを望む願いを持つようになる。聖なる思想の純潔な雰囲気の中に宿る魂は、神のみ言葉の研究を通して、このお方と交わることにより、変えられる。真理はあまりに大きく、あまりに遠大で、あまりに深く、またあまりに広いので、自己が見えなくなってしまう。心はやわらげられ、謙遜と親切と愛のうちに征服される。そして、生来の力が聖なる服従のゆえに拡大される。命のみ言葉の研究から、生徒たちは拡張され、高められ、高尚にされた思いをもって出てくるのである。(教会への証 8 巻 322, 323)

若い思いは、知恵の最高の源、すなわち神のみ言葉を見無視するときに、最も気高い発達を遂げることに失敗する。自分たちが神の世界にいること、創造主のご臨在の許にいること、わたしたちがこのお方のみかたちに造られたこと、このお方がわたしたちを見守り、わたしたちを愛し、わたしたちを心にかけてくださること、これらのことは熟考するのにすばらしい主題であり、思いを広くて高尚な瞑想の分野に導くものである。思いと心を開いて、このような事柄の主題を瞑想する者は、決して取るに足らない、扇情的な主題では満足しない。……

聖書は、わたしたちの敬神的な注目を最高に要求している。わたしたちは、表面的な知識に満足するべきではない。そうではなく、真理の言葉の満ち満ちた意味を学び、聖なるみ言葉の精神を深く飲むよう求めるべきである。(両親、教師、生徒への勧告 139)

5月10日

知恵の源

「主を恐れることは知恵のはじめである。これを行う者はみな良き悟りを得る。主の誉は、とこしえに、うせることはない。」(詩篇 111:10)

神に向かって賢い者となるというのは偉大なことである。主を恐れることは知恵の始まりである。これは心の教育であり、単に書物から得られる教育にまぎって重要なものである。わたしたちの生存している世の知識を得ることは有益で重要不可欠である。しかし、もしわたしたちが、永遠を自分たちの判断に入れないなら、わたしたちは二度と取り返しのつかない失敗を犯すことになる。それは、禁じられた木の実を食べることによって得る知識のようなものとなる。……

書物の伝承から最もよく学んだ人は、神のみ言葉の知識がなければいったい何を正しく知ることができるであろうか。聖書に見い出される教育がなければ、わたしたちはいかにして、神のご臨在のあるところへ行き、このお方のみ顔を拝する次の世界にたどり着くことができるであろうか。この世の知恵や、書物から得られる知識は何も、わたしたちがその上に永遠のために築くことのできる真の確かな基礎を提供しない。天から下ってくるパンのほかは何も、霊的な飢えを満たさない。「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである。…わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」(ヨハネ 6:33, 63)。……わたしたちがキリストのみ言葉を食する時、わたしたちは、霊的な生命力を与える命のパンを食しているのである。

唯一の真でいます神のみ言葉は誤ることがない。無限の知恵、聖潔、力、愛が混ぜ合わされて、わたしたちに神が品性を測られる標準を指し示している。神のみ言葉はとても率直に神の王国の律法を定義づけているので、だれ一人として闇のうちに歩く必要がない。このお方の律法はこのお方のご品性の写しである。それは、神の王国に入りたい者はすべて到達しなければならない標準である。だれ一人として不確かな状態で歩む必要はない。……神の律法は廃されてはいない。それは、永遠の時代にわたって生きるのである。キリストの死によって、それは、大いなるものとされた。そして、罪はその真の光のうちに暴かれた。

神がわたしたちの天父となってくださり、このお方のひとり子がわたしたちの贖い主となってくださり、そして、聖霊がわたしたちの慰め主、相談者、そして聖化の主となってくださるという約束によって、契約のうちには何という救いが明らかにされていることであろう！これ以下のいかなる地にも、わたしたちの足をおいて安全なところはない。(原稿 15, 1898 年)

どのように聖書を研究するか

「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ 5:39)

聖書は、他の書物を研究するように研究するだけでは不十分である。救いとなるように理解するためには、聖霊が探求者の心を動かして下さらなければならない。御言葉に靈感を与えた同じ御霊が御言葉を読む者にも靈感を与えて下さらなければならない。その時、天のみ声が聞かれるのである。……

御言葉を単に読むだけでは、天が計画した結果を得ることはできない。御言葉は研究され、また心に大事に抱かれなければならない。神の知識は精神的な努力なしに、得られるものではない。わたしたちは、わたしたちが神の御言葉を理解できるように、神に聖霊の助けを求めつつ、聖書を勤勉に研究すべきである。わたしたちは一節を取り上げ、神がわたしたちのためにその一節におかれた思想を突き止めることに思いを集中させるべきである。わたしたちはそれがわたしたち自身のものとなるまでその思想に思いをめぐらせるべきである。そうすれば、わたしたちは「主がこう仰せられる」ことを知るのである。

聖書を急いで読んでも得るところはほとんどない。ある者は、聖書を読み通しても、その美しさを見たり、その深い隠された意味を理解するのに失敗する。一節の意味が思いにはっきりとし、救いの計画との関係が明らかになるまで研究するほうが、多くの章を特に定まった目的も視野に入れず、また明らかな教えを得ることなく、読み流すよりは価値がある。聖書を持ち歩きなさい。あなたが機会ある時にそれを読みなさい。聖句を暗記しなさい。あなたが町を歩いているときでさえ、一節を読んで、それを瞑想し、そうすることによって、それを思いに定着させることができる。(ビュー・アンド・ヘラルド 1908 年 6 月 11 日)

人の魂を試す時がわたしたちの目前にある。そして、信仰の弱い者たちはこのような危険な時代に耐えられない。真理の偉大な啓示は注意深く研究されるべきである。なぜなら、わたしたちはみな、神の御言葉の知的な知識を必要としているからである。聖書研究と毎日のイエスとの交わりによって、わたしたちははっきりと、実に明白な個々の責任感と、試練と誘惑の時に耐えうる強さとを得るのである。その生活が隠れたつながりによってキリストに結び付けられている者は、救いにいたる信仰を通して、神の力によって守られるのである。(教会への証 5 巻 273)

5月12日

神なる助け手

「そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。」(コリント第一 2:10)

わたしたちが真理の単純さを厳密に固守すればするほどわたしたちはその深い意味をもっと確実に把握するようになる。そのとき、もし心が神の霊の靈感のもとにあるなら「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」ということができる(詩篇 119:130)。これは、御言葉が単に生徒によって読み流されるのではなく、聖霊によって解釈されることを意味する。

それは、単に光と理解を与える言葉の手紙なのではなく、御言葉が特別な方法で心に記され、聖霊によって適用されるのである。神に献身した思いと心には、光を他の人に伝え、より理解が増し加えられて与えられる。……

神の御言葉が入る余地を与えるほどに、霊的と同様、知的にもますます富ませられる。その人はもっとはっきりとした偏見のない判断力をもつようになり、その見解はもっと幅広いものとなる。霊的な事柄の判断はもっと正しいものとなる。聖霊の働く力の下で、その理解力は、真理を消化し、自己否定の働きをなすために魂を強めることによって真理を個人的な益とするために働かせられる。

ああ、御言葉が心に入ることによって、わたしたちが霊的なことばかりでなく、わたしたちに関係のある地上の事柄についてもはっきりと明白に理解するために、神がわたしたちの理解する機能を拡張することがおできになることを、わたしは主に心と魂と声をもって感謝する。

人と思いに働く神の聖化させる恵みは、判断力を聖化する。これは、いつもわたしたちの前に、このわたしがしようとしていることは、神に栄光を帰するであろうか、ということを念頭に置く。そこには、深いへりくだりの謙遜な精神があり、人間の知恵には依存せずに、それよりはるかに確信をもって、わたしにあなたの道と御旨とを教えてください、というへりくだった祈りと共に、神を求めるのである。そうすれば、主は従っても安全な一連の思想を創造してくださる。過去の経験がよみがえり、安全な道が思いに定着する。

神の御力は人間の力と協力する。(手紙 144, 1898 年)

心の働き

「見よ、あなたは真実を心のうちに求められます。それゆえ、わたしの隠れた心に知恵を教えてください。」(詩篇 51:6)

真理は、受け入れる者にとって、どの点から見ても真理とならなければならない。それが心に押印されなければならない。「なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである」(ローマ 10:10)。「心をつくし 精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」(マルコ 12:30)。これは、神がお受け入れになる奉仕である。…心は、全存在の要塞であり、それが、完全に主の側のものとなるまでは、敵がたえず、その巧妙な誘惑を通して、わたしたちに対して勝利するのである。……

わたしたちにあわれみと恵みと平安を与えるための備えは満ち足りていて豊かである。そうであれば、なぜ、人類は、あたかも自分たちが真理を奴隷のくびきであると考えているかのように行動するのであろうか。それは、心が一度も、主のいつくしみ深きことを味わったことも悟ったこともないからである。(レ・ユー・アンド・ハルト 1906 年 3 月 29 日)

世は偽りの教で満ちている。そして、もしわたしたちが断固として、自分で聖書を探求しないのであれば、世の誤りを真理として受け入れ、その習慣を取り入れ、そして、自らの心を欺くようになる。その教理と習慣は神の真理に対して衝突するものである。……

何が真理であるかを理解することは、わたしたちにとって、最高の重要性和関心のある事柄である。そして、わたしたちの嘆願は、わたしたちがあらゆる真理に導かれるようにと非常な熱心さをもってささげられるべきである。(レ・ユー・アンド・ハルト 1911 年 7 月 6 日)

真理は聖なるものであり、神のものである。それは、キリストのみかたちに従って品性を建設するにおいて、他の何物よりも強く、力がある。そこには、満ち満ちた喜びがある。それが心の中で大事にされるとき、キリストの愛がほかのどの人の愛よりも優先される。これがキリスト教である。これが魂の中にある神の愛である。こうして、純潔で混ざり気のない真理が、存在の要塞を占領するのである。……イエスのうちにあるとおりの真理がわたしたちの品性を形成するとき、それは、本当に真理として見られるようになる。信じる者がそれを熟考するにつれ、それはますます明るさを増し、もともとの美しさで輝くようになる。それは、価値を増し加え、思いを生き返らせ、生き生きとさせ、利己心とキリストに似ていない品性の荒々しさを征服する。それは、わたしたちの壮志を高尚なものとし、わたしたちが聖潔の完全な標準に達することができるようにするのである。(レ・ユー・アンド・ハルト 1899 年 2 月 14 日)

5月14日

最高の教養

「知恵を求めて得る人、悟りを得る人はさいわいである。」(箴言 3:13)

主を恐れることは知恵のはじめである。そして、神に似てかたどられ、形成されることに同意する者は、神のみ働きのもっとも高尚な実例である。……

日毎の神への献身と奉仕における真の信心の体験的な知識は、思いと魂と体の最高の教養を保証する。……わたしたちが、神に誉れを帰し、同胞である人間を祝福しようと自分たちの最高の機能を良心的に用いるために心から知恵を求めて奮闘するとき、神の力が与えられることによって誉れを受ける。これらの機能は神から引き出されるものであり、自分で造るものではないため、それらを神のご奉仕のために用いられるべきタラントとして感謝すべきである。

天より委ねられた思いのタラントは、体の王国を支配するためのより高い力として扱われるべきである。生来の食欲や情欲は、良心と霊的な愛情の支配の下に置かれるべきである。……

イエス・キリストの宗教は、それを受ける者を決して低めたりはしない。それは、決してその人を粗雑な、あるいは荒々しく、無礼で、尊大で、短気な、あるいはかたくなな人とはしない。その反対にそれは、嗜好を精錬し、判断をきよめ、思想をイエス・キリストのとりことすることによって、それらを純潔で高尚なものとする。

神がご自分の子らに持つておられる理想は、人間の考えが最高に及ぶ以上に高い。生ける神はご自分の聖なる律法のうちにご自分の品性の写しをお与えになった。世がかつて知った中でもっとも偉大な教師はイエス・キリストである。そして、このお方が、ご自分を信じる者がすべて到達するようにと与えてくださった標準とは何であろうか。「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ 5:48)。神がご自分の高い行為の領域において完全であられるように、人も人間の領域において完全になれるのである。クリスチャン品性の理想はキリストに似ることである。わたしたちの前には、絶えざる向上の道が開かれている。わたしたちには、到達すべき目標とあらゆる良いもの、純潔なもの、高貴なもの、そして高尚なものが含まれている獲得すべき標準とがある。品性の完全へ向かって、絶えず奮闘し、常に前へ上へと進展していくべきである。(原稿 16, 1896 年)

王道

「わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。地にはあなたのほかに慕うものはない」(詩篇 73:25)

キリストの愛をいづく魂には、キリストにある満ち満ちた自由と、光と、喜びとがある。そのような魂には、分裂した思いはない。全存在が神を慕い求める。その人は、何が義務であるかを知るために勧告を求めて、人のところへ行きはしない。そうではなく、すべての知恵の源である主イエスのもとへ行くのである。彼は、何が打ち立てられた標準であるかを見い出すために、神のみ言葉を探るのである。

わたしたちはいったい、主イエス以上に確かな案内者を見い出すことができるだろうか。真の宗教は神のみ言葉のうちに具現化され、思想、言葉また行いにおいて、聖なるお方の導きの下にいることによって成り立っている。道であり、真理であり、命である方は、へりくだり、熱心に全心をもって探る者を受け入れ、わたしに従ってきなさいと仰せになる。このお方は、彼を聖潔と天へ向かう狭い道へと導かれる。キリストは、わたしたちのためにご自分の身に偉大な値を負って、この道を開いてくださった。わたしたちは、闇の中で自分たちの道を行き、つまずくままに放っておかれはしない。イエスがわたしたちの右側におられ、わたしが道である、と宣言しておられる。そして、主に完全に従うと決心した者はすべて、王道、しかり、主に贖われた者たちが歩むようにとしかれたそれ以上の神の道へと導かれるのである。(原稿 130, 1897 年)

わたしたちがキリストのみ言葉を通してこのお方を学べば学ぶほど、わたしたちは経験において、このお方を自分たちが必要としていることをますます感じるようになる。わたしたちは、キリストのくびきを負い、このお方の荷を取り上げることによって休むことができるまでは、休むべきではない。わたしたちがこのお方への奉仕において、忠実になればなるほど、わたしたちはこのお方をもっと愛するようになり、もっとこのお方を大いなる者とするようになる。大小を問わず、わたしたちが遂行するすべての義務が、忠実になされるようになり、わたしたちが主を知るにつれて、このお方に栄光を帰したいというわたしたちの願望はますます大きくなる。(同上 13, 1897 年)

わたしたちは個々に、栄光から栄光へ、品性から品性へと人の品性が変わえられる変化のうちに、世に対して、キリストの恵みの力を証している。純潔で聖なる方であり、汚されていないわたしたちの原型であられるキリストを眺めることによって、わたしたちは天使たちの社会のために準備しているのである。もし、キリストが天の宮廷において、わたしたちにとって頭であり、王子であられるとすれば、今、キリストはわたしたちにとってどのようなお方か、とたずねるようになる。わたしたちは、自分たちの贖い主を熟考するとき、「わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。地にはあなたのほかに慕うものはない」と言うことができるだろうか。(同上)

無限の方に触れる

「主はこう言われる、『知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶ』と、主は言われる」(エレミヤ 9:23, 24)

世的に欠かすことのできない重要な教育がある。その目的は世において成功することであり、利己的な野心を満足させることである。この教育を得るために多くの生徒たちが思いに不要な知識を詰め込むことに時間と金銭を費やす。世は彼らを博識な者として認める。しかし、彼らの思想のうちに神はない。……

また、それとは大いに異なる種類の教育がある。その基礎となる原則は、世がかつて知った中でもっとも偉大な教師が仰せになったように、「まず神の国と神の義とを求めなさい」というものである。その目標は利己的ではない。その目的は、神に誉れを帰すことである。……神はあらゆる知恵の源であられる。このお方は限りなく賢く、正しく、かつ善なる方である。キリストから離れては、今までに存在した中でもっとも知恵のある者でも、このお方を理解することはできない。彼らは、賢いと公言するかもしれない。彼らは、自分たちの偉業を誇るかもしれない。しかし、キリストに集中している偉大な真理をわきへおいた単なる知的な知識は無に等しい。……

もし、人が一瞬でも、限られた視野の先を見通することができるなら、もし人が永遠のかすかな光を捉えることができるなら、すべての口は誇ることをやめるであろうに。世界のこの小さな原子に住む人間には限りがある。神はご自分の律法に従順で、ご自分の栄光に関わって営まれている数え切れないほどの諸世界をもっておられる。そして、人間が、自分の限界のある力が及ぶ限りに科学的な研究を進めても、そこには彼らが理解できる範囲を超える無限があるのである。

人間が真に賢くなることができる前に、彼らは自分たちが神に依存していることを認めなければならない。そうすれば、このお方の知恵に満たされるのである。神は、霊的な力と同様に、知的な力の源であられる。世が科学においてすばらしい極みに達したとみなしている最高の偉人たちは愛されたヨハネや使徒パウロと比較にならない。知的、霊的力が結合したときに、人間の最高の標準に到達するのである。(両親、教師、生徒への勧告 64 - 66)

聖霊の証

「御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さい。」(ローマ 8:16)

あなたは、あなたの道が神を喜ばせると証してもらうことができる。これは、神のみ言葉を信じることによって、またみ言葉をあなた自身の魂に当てはめることによって獲得できる。これが命のパンを食べることであり、そして、これが永遠の命をもたらすのである。聖句と聖句を比較しなさい。神のみ言葉に描かれた真のクリスチャンの生涯の描写を研究しなさい。

神の律法は義の偉大な標準である。使徒はこれを聖なるもので、正しくかつ善なるものであると宣言している。ダビデは「主のおきては完全であつて、魂を生きかえらせ…」と言っている(詩篇 19:7)。キリストは、「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」……「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」と仰せられる(ヨハネ 14:15, 21)。これは、最も確かな聖霊の証である。……「もしわたしのいましめを守るならば」一心から「あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ 15:10)。

神のみ旨に従順な者は、この世の人生において、困難な時も惨めな時もない。キリストの言葉をもう一度聞きなさい。「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(11 節)。これが、すべての人が特権として持つことができる証である。すなわち、神のみ言葉を自分に当てはめ、…またキリストの要求を现实生活中に持ち込むことを通して魂のうちにあるキリストの喜びである。キリストの一つ一つの言葉を信じ、このお方を信じ、生きた信仰によってこのお方につながることに、完全に保証された希望がある。これが人の経験となるとき、その人は、もはや律法の下にはいない。なぜなら、律法はもはやその人の一連の行動を責めることがないからである。……

信じる者にとってキリストは尊い。信じる者の思いと心を動かすこのお方の霊は、み言葉に記されたことと完全に一致する。御霊とみ言葉は、完全に同意する。こうして、御霊はわたしたちの霊とともに、わたしたちが神から生まれたという証を担うのである。(手紙 11, 1897 年)

5月18日

聖化する力

「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。」(ヨハネ 17:17)

わたしたちが公言する真理は、わたしたちがそれを通して聖化されない限り、何の益もない。……誤りがこれほどまでにわたしたちの地に広まっている中、わたしたちは何が真理であるかを知りたいのである。なぜなら、わたしたちは、誤りによっては聖化され得ないからである。わたしたちが神のみ言葉のうちにありとりの真理を理解すればするほど、神のみ言葉を通してわたしたちの生活をどのように聖化するかをよりよく知るようになる。

わたしたちはこの世に執行猶予を受けた罪人として存在している。そして、神はわたしたちにご自分の真理に服従する機会をお与えになることによって、わたしたちを試しておられる。世のこの時代に生存しているということは、とても厳粛なことである。そして、わたしたちは、天の神との生きたつながりを持つまで満足すべきではない。また、わたしたちは生活の中で毎日、このお方に対する説明の責任を感じるべきである。……

わたしたちは真理からわたしたちを引き離そうとする声に取り囲まれているのを聞く。しかし、もしわたしたちが神の栄光だけに目を留め、このお方のみ旨を行うために奮闘するならば、わたしたちはこのお方のみ声を聞き、それが良き羊飼いの声であることを知るのである。わたしたちが自分たちに話しかける声を理解することは非常に重要である。……

わたしたち一人ひとりに臨む誘惑がある。わたしたちにはみな、克服すべき様々な気質がある。では、わたしたちはどのようにして、この働きを日毎になしているかどうかを知ることができるであろうか。わたしたちは、鏡、すなわち 神の聖なる律法をみなければならない。そうすれば、そこに、わたしたちの品性の欠点を発見する。人が自分自身のことを理解するというのは、非常に難しいことである。わたしたちは、脇に捨てなければならないものがあるかどうかを調べるために厳密に吟味しなければならない。それから、わたしたちが自己を捨て去る努力をなすとき、わたしたちの尊い救い主はわたしたちが勝利者となれるようにわたしたちに必要な助けを与えてくださるのである。……

この世は天国ではない。それは、準備する場所である。それは、わたしたちが切り刻まれ、彫り刻まれ、天の住まいにふさわしいものとされるべき神の仕事場である。であるから、単に真理の感覚で満足してはならない。神は、一步ごとに改革を求めておられる。キリストがわたしたちのために場所を整えるために行かれた住まいにふさわしいものとならなければならない。そして、もしわたしたちが、栄光の王国において天の家族の一員になれさえすれば、わたしたちは永遠の報いを得るのである。神が小羊の血とご自分の証の言葉とによって、わたしたちを助けて勝利させてくださるように。(原稿 5, 1886 年)

キリストによる自由

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない。」(ガラテヤ 5:1)

はじめに、神は人間を、その存在そのものに欠くことのできない条件として、律法の下におかれた。彼は、神の統治の下にあったが、律法のない統治はあり得ない。……

神は、全能、全知、不変の方である。このお方は、常にまっすぐな道を進まれる。このお方の律法は真理、すなわち変わることはない永遠の真理である。このお方の規則はこのお方の特質と調和する。しかし、サタンはそれらを偽りの光の中にあらわれるようにする。それらをゆがめることによって、彼は人間に立法者に対して好ましくない印象を与えようとしている。サタンは自分の反逆を通じて、神を不正で専制的なお方として表そうとやっきになってきた。……

アダムは不服従の結果、すべての人間は律法の違反者となり、罪の下に売られた。彼が悔い改めて、改心しない限り、彼はサタンに仕え、敵の欺瞞に陥り、そして、エホバの規則に敵対する証を担っているのであり、律法のくびきの下にいる。しかし、律法の要求に対する完全な服従によって、人は義とされるのである。キリストを信じる信仰を通してのみ、そのような服従が可能である。人は律法の霊的なことを理解することができる。罪の発見者としてその力を認識することができる。しかし、人が自分たちのために、わたしたちの贖罪 (Atonement) すなわちわたしたちを神と一つにするお方 (At-one-ment with God) であるキリストの救済的な犠牲のうちに備えられた贖罪を受け入れない限り彼らはサタンの力と欺瞞に耐えるのに無力である。

キリストを信じ、このお方の律法に服従する人たちは、神の律法のくびきの下にはいない。なぜなら、信じて服従する者たちにとって、このお方の律法はくびきの律法ではなく、自由の律法だからである。キリストを信じるものはみな、また違反者の上に宣告された刑罰を受けてよみがえられた救い主の保護の力により頼む者は皆、また誘惑に抵抗し、悪のただ中でキリストのご生涯のうちに与えられた原型をまねる者はみな、キリストの贖罪の犠牲を信じる信仰を通して、神性にあずかる者となり、世の欲にある滅びをまねかれるのである。信仰によって、神の戒めに従う者はみな、アダムが違反以前に生きた罪のない状態に到達する。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1902 年 7 月 23 日)

5月20日

わたしのではなく、神の道を

「主よ、あなたの大路をわたしに知らせ、あなたの道をわたしに教えてください。あなたのまことをもって、わたしを導き、わたしを教えてください。あなたはわが救の神です。わたしはひねもすあなたを待ち望みます。」(詩篇 25:4, 5)

モーセに与えられた指示は、「山で示された型どおりに注意してそのいっさいを作りなさい」というものであった(ヘブル 8:5)。モーセは、神のみ働きをするために熱意にあふれ、また彼がもっとも技術に優れ、タラントのある人々に、自分が提案することを何でも実行するようにさせることができたにもかかわらず、彼は鐘やざくろ、飾りふさ、あるいはふち飾り、幕、ほかどのような器であっても、何一つ神の理想として自分に示された型に従わないでは、作ってはならなかった。……彼は40日間の交わりが与えられた。そして、彼が山のふもとに下りてきたとき、彼は山で自分に示されたとおりの正確な型を伝える準備ができていた。……

多くの者が間違いを犯してきたのは、注意深く神のお考えに従うことなく、自分自身の考えに従ってきたことである。キリストご自身が「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない」と宣言された(ヨハネ 5:19)。このお方は完全に自分自身を空しくされたので、ご自分ではいかなる企画も計画もなさらなかった。このお方は神がご自分のために建てられたご計画を受け入れ、御父は日毎にご自分の計画を明らかになさった。もし、イエスがこれほどまで余すことなく依存し、「御父のなさることをわたしが見ることは何であつても、わたしは行うのである」と宣言されたのであれば、人間は自分たちの生涯が単純に神のご計画を実施するものとなるように、どれほどもっと変わるこのない指示を求めて神に依存すべきであろうか!……

わたしたち自身の道は克服されなければならない。誇り、自己満足は十字架につけられ、その空いたところに聖霊と神の力が満たされなければならない。……イエス・キリスト、すなわち天の全能者はご自分の道をもっておられたであろうか。ゲッセマネで魂の苦悩のうちにご自分の天父に祈られるこのお方を見よ。何がこのお方の聖い額から苦しみの血の汗を滴らせたのであろうか。ああ、全世界の罪がこのお方の上にある! このお方の色を失い震える唇から、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」という叫びを出させたのは、天父の愛からの別離であつた(マタイ 26:39)。三度祈りが捧げられたが、「しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」という言葉が続いた(ルカ 22:42)。これがわたしたちの態度でなければならない。わたしの思いのままではなく、神よ、みこころのままになさってください。これが真の改心である。(日付不詳 E.V.・G. 初稿原稿 73)

最も高い標準

「なぜなら、律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるからである。」(ローマ 2:13)

教会名簿に名が記載されている多くのものの生活において、本物の変化がない。真理は外庭に置かれてきた。これまで本物の改心、心のうちになされる明白な恵みの働きがなかった。……

強くて均整の取れた品性を築きたいと思う者は、すべてをキリストのために捧げ、すべてをキリストのためになさねばならない。贖い主は、分裂した奉仕をお受け入れにならない。日毎に彼は自己放棄の意味を学ばなくてはならない。彼は神のみ言葉の意味を理解し、その規則に従いつつ、それを研究しなくてはならない。こうして、彼はクリスチャンの卓越さの最高の標準に到達することができる。人が神性にあずかる者となるならば、その人の霊的な進展には限りがない。日毎に神は彼のうちに働いて、最後のテストの日に耐える品性を完成してくださる。生涯において毎日、彼は他人に仕えるのである。彼のうちにある光は輝き出て、舌の争いを鎮める。日毎に彼は、福音が墮落した人類のために何ができるのかを示しつつ、人と天使たちの前に広大で崇高な実験を行っているのである。

労を惜むことなく、わたしたちの生活になされねばならない改革の働きを熱心に実行しようではないか。自己を十字架につけよう。清くない習慣が支配権を得ようと叫ぶであろうが、イエスの御名によって、その御力を通して、わたしたちは勝利することができる。日毎に、この上ない勤勉さをもって、心を守ろうとする者には、「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」という約束が与えられている(ローマ 8:38, 39)。……神ご自身は「イエスを信じる者を義とされる」お方である。そして、「義とした者たちには、更に栄光を与えて下さった」(30 節)。

罪による恥と墮落は大きかったが、贖う愛による誉れと上昇とはさらに大きいのである。人類には、神のみかたちに似ようと奮闘するとき、天の宝の出資、すなわち彼らを一度も墮落したことのない天使たちよりさらに高いところへ置く測り知れない力が与えられるのである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1904 年 7 月 7 日)

5月22日

神に忠実なのか、人間に忠実なのか

「人間に従うよりは、神に従うべきである。」(使徒行伝 5:29)

ダニエルとその友人たちには、神に対して罪を犯すことのない良心があった。しかし、これは苦闘なしに保たれるものではない。ドラの平野にネブカデネザル王の立てた巨像を礼拝するように要求されたとき、ダニエルの三人の友人たちには、何というテストが臨んだことであろう! 彼らの原則は彼らに偶像に敬意を表することを禁じた。なぜなら、それは天の神と争うものだからである。彼らは、自分たちの持っている全機能は神のおかげであるということを知っていた。そして、彼らの心はすべての人たちに対する寛大な同情で満ちていたが、その一方で彼らには自分たちの神に対する完全な忠誠を自ら立証する気高い大志があった。……

王は三人のヘブルの青年たちに、「あなたがたがもし、角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞くときにひれ伏して、わたしが立てた像を、ただちに拝むならば、それでよい。しかし、拝むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。いったい、どの神が、わたしの手からあなたがたを救うことができようか」と宣言した。青年たちは王に答えて言った。「ネブカデネザルよ、この事について、お答えする必要はありません。もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません」(ダニエル 3:15 - 18)。……これらの忠実な青年たちは炉に投げ入れられたが、神はご自分の忠実な僕たちの救出のためにご自分の力をあらわしてくださった。神の子の様なお方が彼らと共に火炎の中を歩んでおられた。そして、彼らが外に出されたとき、彼らには火のおいさえついていなかったのである。……

このように、この青年たちは、聖霊に満ちて、全国に、彼らが礼拝するお方こそ唯一の真の生ける神であるという自分たちの信仰を宣言した。この彼ら自身の信仰の表明は、彼らの原則のもっとも雄弁な提示であった。偶像礼拝者たちに生ける神の力と偉大さを印象付けるために、このお方の僕たちは自分自身の神に対する敬神を表さなければならない。彼らは、このお方こそ自分たちが誉れを帰し、礼拝する唯一の対象であり、どのようなことも、たとえそれが命を守るためであっても、自分たちを一分たりとも偶像礼拝へ譲歩するよう説得することはできないということを明らかにしなくてはならない。これらの教訓は、この終わりの時代におけるわたしたちの経験に直接重要な関係をもっている。(原稿 16, 1896 年)

忠誠を試す神のテスト

「そして、主は先に約束されたように、きょう、あなたを自分の宝の民とされること、また、あなたがそのすべての命令を守るべきことを明言された。」(申命記 26:18)

神にはわたしたちのためのテストがおありである。そして、もしわたしたちが標準に達するならば、わたしたちは特別な民となるのである。安息日は、わたしたちを世との間に、かすかにではなく、明確にはっきりとした色付けで分離する線を引く。この真理の光を受けてきた者たちにとって安息日はテストである。それは、人間の要求ではなく、神のテストである。それは、神に仕える者たちと仕えない者たちとの間を区別する。そして、この点において、真理と誤謬の間の最後の大争闘がもたらされるのである。神の律法を守ると公言するすべての者たちは一致して、このお方の聖なる安息日をきよく遵守し立つべきである。……

滅びの天使がエジプトの地を行き巡り、人と獣の長子を撃とうとしていたときに、イスラエル人たちは自分の子どもたちを家の中に入れ、共におらせ、柱に血を塗りつけるようにと命令された。そして、だれ一人として家から出ないようにと命じられた。なぜなら、エジプト人の中にいるのを見い出された者はすべて、彼らと一緒に滅ぼされるからである。

わたしたちはこの教訓に注意を払うべきである。もう一度、滅びの天使が地を行き巡ることになる。神の民には、しるしがつけれなくてはならない。そして、そのしるしがこのお方の聖安息日の遵守なのである。わたしたちは、わたしたち自身の意志と判断に従って、神があきらめてわたしたちに同意してくださるであろうなどとうぬばれてはならない。……あなたにとっては重要でないように見えるものも、あなたの命を守り、あなたの魂を救うための神の特別なご計画においては、もっとも重大な結果をもたらすものかもしれないのである。神はわたしたちのためにご自分が仲裁してくださるとき、それに関連してわたしたちにある役割を担わせることによって、わたしたちの信仰を試しておられる。条件に応じる者たちに、約束は成就されるのである。……

わたしたちは、自分の子どもたちに忠実に神の戒めを教えなくてはならない。わたしたちは彼らを親の権威の支配下に置くべきである。そのとき、信仰と祈りによって、彼らを神に委ねるのである。そうすれば、このお方はわたしたちの努力と共に働いてくださる。なぜなら、このお方がそう約束してくださったからである。そして、わきあふれる災害が地を行きめぐるとき、彼らはわたしたちと共に、主の仮屋の奥に隠されることができるのである。(原稿 3, 1885)

5月24日

「安息日を覚えて」

「安息日を覚えて、これを聖なる日として守りなさい。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息日であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」(出エジプト記 20:8 - 11 英語訳)

第四条の戒めは、明確である。わたしたちは、安息日に自分たち自身の仕事をしてはならない。神はわたしたちが働くために六日を与えてくださった。しかし、このお方は第七日目をご自分にとっておかれた。そして、このお方はそれを聖とする者たちに祝福を宣言してこられた。六日目は安息日のために必要な準備がすべてなされるべきである。……すべての買い物、料理は金曜日になし終えてしまうべきである。入浴を済ませ、靴を磨き、衣服を整えなさい。病人は安息日にも世話が必要である。そして、彼らを楽にしてあげるために必要なことは何であつても、あわれみの行為であり、戒めを犯すことではない。……しかし、わたしたち自身の働きは何であつても聖なる時間にくい込むことは許されていない。…

主は、ご自分の民が世により高く、聖なる模範を与えることを望んでおられる。安息日には、家族が厳粛に神に献身すべきである。……すべての者が神の聖日に神に誉れを帰すために一致しようではないか。……

もし、あなたが天へ向かって前進するなら、世はあなたに対して激しく摩擦を加えるであろう。……地の当局が介入するであろう。あなたは、苦難に遭うであろう。精神に傷を負い、激しい言葉、嘲笑、迫害に遭遇するであろう。人は、あなたが神に不忠実になるような法律や習慣に従うように要求するであろう。ここで、神の民は命への道における十字架を見出すのである。しかし、もし第四条の戒めの安息日が神聖なものであれば、事実、それが第三天使のメッセージにおいて見られるように、神とその民の間のしるしであれば、わたしたちは神に誉れを表すために、すべての言葉とすべての行動に注意しなければならない。……

あなたが、岩に貝が固着しているように、キリストに結合しているのでなければ、下降する強力な急流は、あなたの足をさらってしまう。(原稿 3, 1885 年)

喜びと祝福の日

『もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、むなしい言葉を語らないならば、その時あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、あなたを養う』これは主の口から語られたものである。』（イザヤ 58: 13, 14)

安息日は、神の時間であって、わたしたちのものではない。わたしたちがそれを侵害するとき、わたしたちは神から盗んでいるのである。……神はわたしたちに自分たちの仕事をするようにと六日間をそっくり与えてくださり、ただ一日だけをご自分のためにとっておかれた。これはわたしたちにとって、祝福の日、わたしたちが世俗的なことをすべて脇へおいて、思想を神と天へ集中させる日となるべきである。

しかし、わたしたちは神を礼拝しながら、これを骨折り仕事だと思ってはならない。主の安息日はわたしたちとわたしたちの子どもたちにとって祝福となるべきである。彼らは安息日を喜びの日、神が聖別された日として見なければならない。そして、彼らは適切に教えられるならば、安息日をそうに考えるようになるのである。……彼らに咲いている花や開いたつぼみ、そそり立つ木々や美しい芽の草を指し示して、神がこれらすべてのものを六日の間に造られて、第七日目に休まれ、それを聖とされたことを教えることができる。こうして、親は彼らの教えの教訓を自分の子どもたちに結びつけ、これらの子どもたちは自然の事物を見たときに、それらすべてを造られた偉大な創造主を思い起こすようになる。……

わたしたちは、自分の子どもたちに、安息日に楽しんでほしくない、あるいは戸外を歩くのは悪いことだと教えてほしくない。ああ、そうではないのである。キリストはご自分の弟子たちを安息日に湖畔へと導き出し、彼らにお教えになった。安息日のこのお方の説教は、いつも壁に囲まれたところで説かれたものではなかった。……

多くの者が、都合の良いときには、安息日を守れるのにと言う。しかし、この日はあなたの物ではないのである。それは、神の日であって、あなたには、わたしの財布を盗む権利がないのと同じくらい、それを取る権利はないのである。神はそれを取っておかれた。それを聖別し、祝福された。そしてこの時間をこのお方への奉仕のために捧げ、それを誉めるものとし、それを喜びと呼ぶのは、あなたの義務である。(原稿 3, 1879 年)

5月26日

責任の重さ

「神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。」(ヨハネ第一 1:6, 7)

与えられた光の度合いが、責任の重さである。自分たちが将来の命に関して獲得できる知識を用いるのに忠実な者に、天への道は明白にされる。……エデンの園での違反の最初の行為を見てみなさい。アダムとエバには、パラダイスの律法が、故意の不服従に対する刑罰と共にはっきりと述べられていた。彼らは従わなかった。そして、不服従は確かな結果をもたらした。死が世に入った。

違反は神の戒めに対する不服従である。これらの戒めにいつも従ってきたならば、罪はなかったはずである。違反の刑罰はいつも死である。キリストはご自分の命を人にお与えになることによって、死刑宣告を直ちに施行されることを防がれた。……正義は人間が光を持つことを要求し、そして、それはまた、それを与えるためには神の御子の死という代価が支払われた天来の光のうちに歩むことを拒む者は、刑罰を受けなければならないと要求する。罪人の罪は、「与えられたが用いなかった知識、あるいは不正に用いられた知識に比例する」というのが、正義の原則である。神は人間が光のうちに歩み、天使たちの前で、また人々の前で、キリストを罪のためのあがないの供え物として認めて、このお方の犠牲を自分たちの大いなる祝福として尊重すると証することを期待しておられる。……

今と永遠のために、墮落した人類を救うための神の御子の犠牲は、人間に対して拘束力のある要求をしている。もし、神がご自分の分を果たすのに失敗なされたのであれば、もし、このお方がご自分のみ旨を完全に表されなかったのであれば、もし、このお方が人間に偉大な救いをおおりにするような理由を何か与えてこられたのであれば、人は知らなかったというのを正当な言い訳として訴えることができたかもしれない。しかし、このお方は道を明らかにしてこられた。このお方はすべての人が救われることを望んでおられる。ある者には、他の者より大きな光が与えられている。各々、自分に与えられた光によって裁かれるのである。……神はあなたが自分に与えられた光を聖なるものとして大事にするよう計画なされた。(手紙 180, 1902 年)

天の印章

『山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい』と言われた。」
(ヘブル 8:5)

モーセに山上で幕屋の建設に関して指示をお与えになった際、各時代のご自分の民に重要な教訓をお与えになった。この働きにおいて、このお方はすべての詳細に渡って完全を要求された。(ビュー・アンド・ヘルド 1912 年 1 月 11 日)

世の悪がますます顕著になり、邪悪の教えがより完全に展開され、広く受け入れられるようになるとき、キリストの教えは、改心した男女の生涯においてははっきりと例証されて、前面にあらわれなければならない。……

クリスチャンが手をつけるすべてのことに永遠の命の思いが織り込まれるべきである。もし、実行される働きが性質上、農業的なものであっても、機械的なことであっても、なお天の型に準ずるものとすることができる。……キリストの恵みを通して、キリストのような品性を完成するためにすべての備えがなされてきた。そして、神はご自分の民が自分たちのあらゆる社会上、商売上の取引において、天の原則があらわされるとき、誉を受けられるのである。……

主は最大の事柄において要求されるのと同様に、最小のことにおいても、正直を要求される。最終的に天の宮廷の一員として受け入れられる人たちは、この地上において、あらゆる厳密な点において主のみ旨を実行することを求めてきた男女、自分たちの地上の働きに天の印章を押そうと努めてきた男女である。地上の幕屋が天の聖所を象徴するためには、それがあらゆる部分において完全であり、それが微細に至るまで、天にある原型と同様でなければならなかった。ついに天の御前に受け入れられる者たちの品性も同様である。

神の御子は、男女がご自分のうちに、神が唯一お受け入れになることのできる完全な品性を表すためにこの地上に下ってこられた。キリストの恵みを通して、すべての備えが人類家族の救いのためになされてきた。クリスチャンだと公言する者が携わるすべての取引がキリストの行いのように純潔であることは可能である。そして、キリストのご品性の徳を受け入れ、このお方のご生涯の功績を自らのものとする魂は、ご自分のひとり子のように、神の御目に尊いのである。(日付不詳 エル・G・パット原稿 73)

5月28日

神の満ちみちた徳で満たされる

「また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように」(エペソ 3:19)

神に完全に絶対的な服従を捧げる者だけが、上にある住まいにふさわしい。神は、わたしたちがご自分に従うのにまったく従順であり、いつもこのお方の栄光を視野に入れているのでなければ、ご自分の最も希少な賜物も感謝しないということをご存知である。……

あなたの気質がどのようなものであっても、またあなたの先天的、また後天的傾向がどのようなものであっても、神の型にしたがって形成しなければならない品性がある。わたしたちには、自分自身の性質の型や名を残して良い理由は何もない。なぜなら、キリストは、わたしたちがご自分の型とご自分のみ名を自分のものとするができるように、死んでくださったからである。わたしたちは、自分自身の自己を残しながら、神に満ちているもので満たされることはできない。わたしたちは自己を空にしなければならない。もし、最終的に天を獲得するとすれば、それはただ自己を捨てることを通して、またキリスト・イエスの思い、精神、また意志を受け入れることにおいてのみである。……

わたしたちは永遠の命のために喜んで値を払うであろうか。わたしたちは座って、はたして天には自己に死に、自分たちの意志を曲げて完全に神のみ旨に調和するように形作るという犠牲を払うほどの価値があるかどうか代価を見積もる準備ができているのであるか。こうしている限りは、神の変化させる恵みをわたしたちが体験することはない。

わたしたちが空にされた自分たちの性質を主イエスとそのみ働きに差し出すや否や、このお方は空いたところをご自分の聖霊で満たしてくださる。わたしたちはそのとき、このお方がご自分に満ちているものをわたしたちに与えてくださると信じることができる。このお方は、わたしたちが減じるのを望まれない。わたしたちが、このお方が望まれるすべてのものをこのお方の奉仕に捧げることほど、緊急に望むものはない。……

永遠には終わりが無い。わたしたちの地上での生涯は良くても短い期間である。では、わたしたちは何のためにまただれのために生き、働いているか。そして、それらすべての結果は何であろうか。

わたしたちはイエス・キリストの宗教が毎日に必要である。わたしたちがなすこと話すことはみな、神の御目にとまる。わたしたちは世と、天使たちと人に見世物となっている。……キリストの教会はこのお方のご品性を代表しなければならぬ。……このお方は人間の感情の強さをすべて持つておられたにもかかわらず、ただの一回たりとも純潔でも、高尚でも、気高くない行動を取る誘惑に屈することにはなかった。(ビュー・アンド・ヘルド 1906年3月8日)

天の秤で測られる

「主はすべてを知る神であって、もろもろのおこないは主によって量られる。」(サムエル上 2:3)

主はすべてを知られる神である。このお方の御言葉のうちに、このお方は、彼らの品性の発達と彼らのすべての動機が善か悪かを測る方として表されている。……

自分自身の心を探り、神が賜ったすべての機能を向上させることは、すべての人の永遠の利益のためである。みな主がはっきりとご覧にならない動機はどの人の心にも存在しないということを覚えていよう。各人の動機は、人間の運命があたかもその一つの結果にかかっているかのように厳密に量られる。……天にまします神は真であり、どんなに複雑な計画であっても、あるいはどんなに注意深く隠された動機であっても、神ははっきりと理解されないものは何一つない。このお方は、すべての心の秘密のたぐらみを読まれる。

人間は、将来のために、神にはお分かりにならないと思って、不正な行動を計画するかもしれない。しかし、数々の書物が開かれる大いなる日にはすべての人が書に記されている事柄によって裁かれ、これらの行動がありのままに表れる。……

いま次の言葉を考えるべき必要のある者が多くいる。「テケルは、あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです」(ダニエル 5:27)。聖であり、とこしえであり、変わることはない神の律法こそ、人が試されなければならない標準である。この律法は、わたしたちが何をすべきか、またわたしたちが何をすべきでないかを定義し、あなたはしなければならない、あなたはしてはならないと告げている。この律法は、二つの大きな原則にまとめられている。『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』(ルカ 10:27)である。

これは、そのまま言われている通りのことを意味している。ああ、何とわずかな者しか、裁きの大いなる日に神の律法にあう備えをしていないことであろうか？……神の聖なる律法に照らして量られる人が足りないことが表れる。

わたしたちは、律法の規則によって啓発される。しかし、だれ一人としてそれによって義認されることはない。量られて足りないことが表れるのが、生来わたしたちの記録である。しかし、キリストがわたしたちの仲保者であられる。そして、このお方をわたしたちの救い主として受け入れるとき、わたしたちは、「わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」という約束を主張することができる(ローマ 5:1)。(レビュー・アポ・ヘラルド 1907年5月9日)

5月30日

神と人とのパートナーシップ

「あなたのみ手はわたしを造り、わたしを形造りました。わたしに知恵を与えて、あなたの戒めを学ばせてください。」(詩篇 119:73)

人間の器官は神の御手のわざである。体のさまざまな機能を果たす全ての内臓は、このお方によって造られた。主は、わたしたちに食物や飲み物を与えてくださる。それは、体の必要が満たされるためである。このお方はご自分の子らのための食物が育つのにふさわしいさまざまな特性を地にお与えになった。このお方は日光や雨、前の雨と後の雨をお与えになる。このお方は雲を形作り、露を送られる。すべてがこのお方の賜物である。……

しかし、これらのすべての祝福も、わたしたちがこのお方と協力して、自分自身を知り、精密な人間という機械をどのように手入れするかを理解するために骨折りの努力をなさない限り、わたしたちのうちにこのお方の道徳のみかたちを回復することはない。人は、自らを自然の法則との調和のうちに保つよう勤勉に手助けをしなければならない。この驚くべき機械が正常に働くように維持する働きにおいて神と協力する者、知的に自然の法則に服従することを求めて自分のすべての力を神に捧げる者は、神より与えられた自分の人間性をもって立ち、天の書物に人として登録されるのである。

神は人に耕すための土地をお与えになった。しかし、収穫を刈り取るためには、神と人間の側で調和の取れた行動がなくてはならない。すきや他の仕事のための道具は、折にかなって用いられねばならない。種は、その季節に蒔かれねばならない。人は、自分の分を果たすのに失敗してはならない。もし、彼が不注意だったり、怠慢だったりすれば、その不忠実さは彼自身に逆らって証を立てる。収穫は、彼が費やしたエネルギーに比例する。

霊的にも同様である。……共同関係、すなわち神の御子と悔い改めた罪人の間の神聖な関係がなくてはならない。わたしたちは神の息子むすめとされるのである。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 1:12)。キリストは、ご自分を信じる者すべてにこれほどまでに豊かに与えられるあわれみと恵みを備えられる。このお方は救いがかかっている条件を果たされる。しかし、わたしたちは信仰のうちに、祝福を受け入れることによって、自分たちの分を果たさなければならない。神が働かれ、人が働く。誘惑への抵抗は、人の側からなされねばならないが、その人は神からその力を得なければならない。こうして、彼はキリストの共労者となるのである。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1901 年 2 月 27 日)

無制限の祝福

「主のみこころにかなった生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。」(コロサイ 1:10)

パウロがコロサイ人たちのために祈った祈りを研究しよう。「そういうわけで、これらの事を耳にして以来、わたしたちも絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り、主のみこころにかなった生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍び」(コロサイ 1:9 - 11)。

この祈りは何と完成していることか! 受けることがわたしたちの特権である祝福には制限がない。わたしたちは「神の御旨を深く知」ることができる。聖霊は、もしパウロの兄弟たちに、要求に応じて神から答えを得る可能性がなかったなら、彼らのためにこの祈りを捧げるようにパウロに靈感を与えられたはずはないのである。……

エペソのある教会にパウロは次のように書き送った。「こういうわけで、わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあつて『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたに、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように」(エペソ 3:14 - 21)。

ここにクリスチャン生涯の可能性が目前に広がっている。今日教会は、どれほどこの標準からかけ離れていることであろうか! ……自己、自己、自己、それだけが表されている。わたしたちはいつ目覚めるのであろうか。わたしたちは、いつキリストのご期待にそえるのであろうか。(手紙 179, 1902 年)

研究 16

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



なまぬるい人への治療法

親しくなるために、欠かすことができないもの—時間

前回、聖霊の賜物が教会に与えられた目的を見ました。それは、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至らせるためであり、使徒たちのようにキリストと親しく交わり奉仕のわざを行うためでした。親しくなるためには時間が必要です。そして、その時間と共に、神様はこの終りの時代に、キリストを親しく知るための特別な賜物を与えてくださいました。

「証の書は、神のみ言葉を矮小化するものではなく、それを高め、思いをそれに向けさせ、真理の美しい単純さがすべての人に印象づけられるようにするものである」(教会への証 5 卷 665)。

「もしあなたが、聖書の基準に到達し、クリスチャンの完全を獲得したいとの願いをもって、神のみ言葉を自分の研究主題としていたなら、証の書は必要がないはずであった。…

追加的な真理は持ち出されていない。かえって、神は証の書を通して、すでに与えられた偉大な数々の真理を単純になさり、ご自身が選ばれた方法によって、思いを目覚めさせ、真理を印象づけようと、民の前にそれらを持ち出されたのである」(同上)。

「記された証は、新しい光与えられるためではない。かえって、すでに表された靈感の真理を心に生き生きと印象づけるためである」(同上)。

最大の問題である罪を取り除く方法

最大の問題は罪ですが、罪の問題が根深いのは、それが寄生しているからです。寄生虫や寄生植物のように、罪は罪だけでは存在しません。ゴミが収集

できたら焼却炉に入れて解決するように、罪だけであれば、神聖な火がそれを完全に焼失することが預言されています。しかし、罪が人に寄生しているため、まず人から完全に分離するための働きが必要です。その罪を人から取り除くために、聖霊が送られました。

そもそも、罪はどのように侵入したのでしょうか。創世記3章に罪が入ってきた歴史がありますが、その原因を主は次のように言われました。「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」(創世記3:17)。つまり、神のみ言葉以外のものを聞いたこと、これが罪の始まりでした。魂の敵は、ちょうど毒を食べ物の中に混ぜるように、神のみ言葉を完全に否定するのではなく、そこに神のみ言葉以外のことを混ぜ混みます。ですから、その治療法は、この原因を取り除くことです。すなわち、神のみ言葉だけを聞くととき、それ以外のものが入って生じさせたすべての問題を根絶することができます。しかし、ここでさらに聖霊が必要とされている理由があります。エバがへびに欺かれて以来、人は自分で罪を識別することができなくなりました。そして、罪があるままに忌むべきものとして見えなければ、人は完全にわなから自由になることはできません。それはちょうど、猿を捕まえるために瓶の中に食べ物を入れておくようなもので、その中に入った食べ物をつかんでいる手は瓶から抜き出すことができないのと同じです。

ですから、イエスは次のように約束して下さいました。「〔聖霊〕がきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。罪についてと言ったのは、彼らがわたしを信じないからである」(ヨハネ16:8, 9)。罪かどうかの判断は、御霊によってはじめて可能です。聖霊が教えて下さらない限り、真の罪の自覚はありません。自分の感覚による“悔い改め”によって謝ったとしても、性質が変わっていなければ長続きしません。

「罪に抵抗してこれに打ち勝つ唯一の道は、制限された力ではなく天来の満ち足りた力をもってこられる第三位の神、聖霊の偉大な働きを通してである。世のあがない主によって達成されたことに効果を与えるのはみたまである。心が清くされるのはみたまによってである。みたまによって、信者は神の性質にあずかる者となる。すべての先天的後天的な悪の傾向に打ち勝つ天来の力として、またご自身の品性を教会に印象づける天来の力として、キリストはみたまをお与えになった」

(各時代の希望下巻156)。キリストによって達成されたことに不足はありませんが、「効果を与える」、すなわち、わたしのものになるのは、聖霊によってです。このお方は、神として来られます。「わたしたちの神は、実に、焼きつくす火である」(ヘブル 12:29)。聖霊を通して、イエスが戸をたたいておられます。わたしたちは聖霊の声を聞き分けて戸を開かなければなりません。聖霊の声であるかどうかを見分ける基準は、前述の通り、使徒の言葉、また律法と預言者の言葉です。こうして彼らの言葉を通して語る聖霊に答えて戸を開くなら、心の中に入って来てくださり、このお方のご臨在は、そこに存在する罪を焼き尽くす火なのです。

キリストは、人を汚すものは中から出るものであると言われました。「油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉は、これから流れ出るからである」(箴言 4:23)。人の中の状態が、その人がどういう存在であるかを決めます。

Natural man 生まれながらの人 冷たい人

Spiritual man 霊なる人 熱い人

Carnal man 肉なる人 なまぬるい人

「このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう」(黙示録 3:16)。「なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ローマ 8:7)。これがラオデキヤ状態です。

この状態を解決する方法は、徹底的な変化、すなわち新しく生まれることです。命の源泉から変わる新しい命が必要です。「水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」(ヨハネ 3:5)。

「クリスチャンの生活は古いものを修正したり改良したりすることではなくて、性質が生れ変ることである。自我と罪に対する死があり、まったく新しいいのちがある。この変化は聖霊の効果的な働きによってのみ行われる」(各時代の希望上巻 202)。まったく新しい命が与えられること、これが義認です。始まりが霊によってでなければ、その先に進むことができません。霊によって始められた働きは、主と同じ姿に変えられるまで必要です。つまり、罪から離れる唯一の方法＝死(焼き尽くす火)、新しい命(義認)、そして主と同じ姿へ(聖化)と進んでいくのです。

「わたしたちはみな、顔おいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるの

である」(コリント第二 3:18)。これが聖化です。

この新生について、詳しい説明を受けたのはニコデモでした。ニコデモという名は、勝利者 (conqueror) という意味を持ちますが、彼は自分が勝利できないことを感じて、イエスの御許へ来ました。彼は、律法について知っていました。しかし、どのようにしたら、名前通りの者になれるのでしょうか？ニコデモはそのとき、前述の Natural man ではなく、Carnal man、すなわち肉の人であり、神の律法に従い得ない者でした。そこで、イエスは彼に次のような診断をなさいました。「イエスは答えて言われた、「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ 3:3)。そのとき、肉の人は不思議に思いました。そこでイエスは、「あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」と言われました(ヨハネ 3:7)。

そのとき、ニコデモは、彼は、「何を」ではなく、「どのように」が知りたくなりました。この心の中の質問に、イエスが答えて下さいました。そしてその方法はとても印象的なものでした。「そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」(ヨハネ 3:14)。キリストはご自分の十字架がその方法であることを明かされました。これを説明されたときに、御霊が心に入り、心に刻まれていきました。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である」(コリント第一 1:18)。

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である」(ローマ 1:16)。

「なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである」(コリント第一 2:2)。

「しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える」(コリント第一 1:23)。

救いを受けさせるために必要なのが十字架の力であり、救いを受けている人にも必要なのが十字架の力です。

とを信じました。それ以来、地震、暴風雨、津波、疫病、飢饉、そして火事や洪水による破壊が増えてきました。これらすべて「諸国民は悩み…おじ惑い」というのは主の来られるのが近いということを宣言しています。

そしてこれらのしるしを見た者にこのお方は「これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」と仰せになりました (マタイ 24:35, 36)。

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」 (テサロニケ第一 4:16 - 18)。

キリストは来られます。雲と大いなる栄光をもっておいでになります。大勢の輝く天使たちがこのお方に付き添います。このお方は死者をよみがえらせ、生きている聖徒を栄光から栄光へと変えるために来られるでしょう。

このお方は、このお方を愛し、このお方の戒めを守った者に誉を与え、そして彼らをご自分の所に迎えるために来られます。このお方は彼らになさったご自分の約束をお忘れにはなりません。

家族の輪は再びつながれます。愛する人が死ぬのを見ると、神のラッパが鳴り響く朝に「死人は朽ちない者によみがえらせられ、わたしたちは変えられるのである」ということを思うことができます (コリント第一 15:52)。

この時が近づいています。もうしばらくすればわたしたちは王をその美しさのうちに迎えることができるでしょう。もうしばらくすれば、このお方はわたしたちの目から涙をぬぐい去ってくださいます。もうしばらくすれば、このお方は「その栄光の前に傷なき者として、喜びのうちに立たせてくださるかた」としてわたしたちを紹介なさいます。

それゆえにこのお方はご自分が来られるしるしをお与えになった時、「これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」と仰せになりました (ルカ 21:28)。

長芋のから揚げ

■材料（2～3人分）

長芋	240 g
しょうゆ	大さじ 1 と 1/2
すりおろししょうが	小さじ 1
粉末昆布だし	小さじ 1/2
片栗粉	大さじ 5～6

■作り方

1. 長芋は皮をむき、ひと口大の乱切りにします。
2. ビニール袋に入れ、しょうゆ、すりおろししょうが、粉末昆布だしを加え、なじむように混ぜ、15分ほど置いて味を染み込ませます。
3. 味のしみた長芋に片栗粉をまぶし、180℃の油できつね色になるようにこんがり揚げます。
4. バットにあげて油を切り、器に盛ります。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第62話

再び来られる(II)

救い主は付け加えて、「いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」(マタイ 24:32, 33)。

キリストはご自分が来られるしるしをお与えになりました。このお方はわたしたちがこのお方が戸口まで近づいておられるのを知ることができるであろうと言われました。春に木が葉を出すと、夏が近づいているのをわたしたちは知ることができます。確かに、日と月と星とにしるしが現れる時、わたしたちはキリストの来られることが近づいているのを知ることができます。

これらのしるしは現れました。1780年5月19日に太陽は暗くなりました。その日は歴史上「暗黒日」として知られています。北アメリカの東部では、暗黒がとて大きかったので多くの場所の人々は昼間にロウソクをつけなければならないほどでした。そして真夜中すぎまで月は満月でしたが、光を放ちませんでした。多くの人が審判の日が来た信じました。キリストのみ言葉の中に見られる理由を除いては、この不自然な暗黒についての納得のいく理由はこれまでに与えられていません。太陽と月が暗く

なることは、このお方が来られることのしるしでした。

1833年11月13日は、人がこれまで見た中で最も素晴らしい落星の表れでした。また何千もの人が審判の日が来たこ



(45 ページに続く)